

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第64号 平成22年3月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



海軍操練所跡碑

神戸海軍操練所

中央区新港町の京橋交差点のすぐ側に、錨の形をした碑が建っています。幕末の頃、この地にあった神戸海軍操練所の記念碑です。

文久三年（一八六三）将軍徳川家茂が大坂湾へ視察に訪れました。同行した軍艦奉行並勝海舟は、自らの渡米経験から海軍の重要性を説き、神戸村に海軍操練所の建設を進言、許可を得ます。その後、海舟は神戸に屋敷を構え、海軍塾を開きました。この塾頭を務めたのが坂本龍馬です。塾生には他にも、陸奥宗光や伊東祐亨などがいました。

元治元年（一八六四）に完成した海軍操練所は、敷地の総面積が約一万七千坪、構内には船入れ場やポンプ場が設けられた大規模なものでした。海軍士官を目指し、諸方から集まった若者はおよそ二百人ほど。その姿は「高履を穿ち、漢詩を高吟し、長劍腰に横へて兵庫神戸の市中を闊歩す」と『神戸開港三十年史』（明治三十一年刊）に記されています。

残念ながら、操練所は勝海舟の失脚により一年を待たずに閉鎖されてしまいますが、ここに学んだ人々の働きが、新しい時代を切り開く力となったことは確かでしょう。

奇蹟の画家 後藤正治（講談社）

神戸在住の画家、石井一男。兵庫区に生まれ育った石井は、アルバイト収入でつましく暮らしながら絵を描きためていた。

一九九二年、当時の海文堂書店社長に初めて絵を見てもらった。この出会いが、世に出るきっかけとなる。同年元町の海文堂ギャラリーで開かれた初個展以降、東京・大阪など各地で開かれた個展は大盛況で、絵は次々と売れていく。しかし、石井は清貧な生活を変えようとはしなかった。寡黙な石井は自分の作品について多くを語っていない。この本では、石井の作品を手元に置いて人々の絵との関わりを通じて、石井の絵の魅力を浮かび上がらせている。



生きていくための短歌 南悟（岩波書店）

定時制神戸工業高校の生徒が、働き学ぶ日々を詠んだ短歌を紹介。同校教員の著者は、二十年以上にわたり授業として短歌創作を行ってきた。不登校や引きこもり、震災などを乗り越え、思うに任せない人生に時には無力感を覚えながらも、仕事と学業の両立に真摯に取り組む彼らの歌には、生きることの実感が滲む。それは、地道に繰り返される日常に潜む苦しさや喜びのひとつひとつでもある。

湊川神社天井奉納画―湊川神社拝殿内拝殿外拝殿 湊川神社天井奉納画編集委員会（湊川神社社務所）

本書は、平成十九年大楠公六百七十年大祭事業の一つ、「奉納天井画修復」を記念して作成された図録である。

昭和二十年、神戸大空襲で全焼した社殿は、昭和二十七年に再建された。天井画はその際、当時の著名画家達が依頼を受けたものだ。美しく蘇った百六十三点の絵画。それらからは、戦後の混乱期、社の再建にかけた官司と芸術家の熱い思いが感じられる。

神戸の花街・盛り場考―モダン都市にぎわい 加藤政洋（神戸新聞総合出版センター）

近代神戸の発展の過程で創り出され、時と共にうつろった多くの「盛り場」。著者は、それらを掘り起こし、神戸の都市空間形成史上欠くべからざるものとして位置づけた。

読者は、名所案内・新聞記事・文学・写真などに導かれ、往時にぎわいの中へ。もはや残影さえおぼろな花街の姿が、それぞれの街の小唄にのって浮かび上がる。長田区南部に位置し、西新開地と呼ばれて親しまれた地域の市街地化と繁華街形成の過程も興味深い。

最終章では元町商店街の歴史をさかのぼり、歩くこと自体が愉しみとなるような「散歩街」が成立していく様子をたどっている。

かるたKOBÉ―神戸 神戸市小学校教育研究会社会科部・理科部編（甲南出版社）

「雨上がり神戸をいろいろるアジサイの花」から「わが町のモダンな洋画家小磯良平」に至る四十六組のかるたは、地域学習に役立つことを目的に編集された。

カラー写真仕様の絵札では、実際の神戸の風物を見ることができ、裏につけられた総ルビ付の解説文で神戸への理解が深められる。ガイドブック的にも幅広い層に楽しんでもらえそうである。

“体験者が語る”新型インフルエンザへの学校の対応―そのときあわてないマニュアルブック 許鍾萬・TOS S兵庫編（明治図書出版）

昨年五月十六日、神戸で国内初の新型インフルエンザ感染者が確認された。その後の対策で社会が大きく揺れたことは記憶に新しい。本書は現場の教師たちによる、全県休校一週間の記録を編み取れる。面からは当時の混乱が読み取れる。様々な問題は、今後の危機管理に生かしていかなければならないだろう。「学級・学校文書資料集」付きで、心強い内容となっている。



防災の決め手「災害エスノグラフィ」―阪神・淡路大震災秘められた証言 林春男ほか（日本放送出版協会）

エスノグラフィとは、民族学や文化人類学の分野で用いられる方法。対象となる集団の活動に自ら参加し、見たことをつぶさに記録する、あるいは、インタビュー調査をするというもの。

マスメディアの情報には、限界がある。各種の報告書や研究論文は、データに基づく分析が基本となり、災害への理解は進まない。災害現場に居合わせた人達の悩みや苦勞、問題解決のプロセスなどを明らかにしていくエスノグラフィの手法は、災害の全体像を浮き彫りにし、今後の災害への教訓や知恵を導きだすことがわかる。



(C) 角川書店

屁のような人生―水木しげるの生誕八十八年記念出版 水木しげる（角川書店）

水木しげるの生立ち、学生時代、従軍経験、復員後の各種職業を経て漫画家として大成するまでの経歴が、本書には細やかに綴られている。その過程で数多くの苦勞を経験しているにもかかわらず、文面からは暗い様子を微塵も感じさせないのは彼の人物故であろうか。また兄弟家族・友人知人から見た水木しげるの像や、初期の作品も収録され、摩訶不思議な水木ワールドの魅力が余す所なく堪能できる。

有馬温泉「陶泉御所坊」殺人事件―建築学者・京極要平の事件簿 柏木圭一郎（小学館）

親友、木俣次郎と旧交を深めるために有馬温泉の旅館「陶泉御所坊」を訪れた京極要平。宿泊した翌日、親友は別館の庭園で死体となって発見される。事故として処理されようとするが…。建築学者の主人公が、旅館建築の知識を駆使して真相に迫る。日本に実在する名旅館を舞台としたシリーズの第一弾。

|| その他の新刊 ||

ピンクの雨 新野彰子（幻冬舎ルネッサンス）

秀吉を襲った大地震―地震考古学で戦国史を読む 寒川旭（平凡社）

おどろき！なっとく★わくわくサイエンス―みんなでナゾ解き身近な不思議 栗岡誠司編著（神戸新聞総合出版センター）

絵の家のほとりから 石井一男（ギャラリー島田）

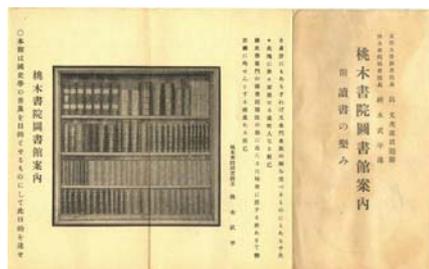
書庫探訪 その②〇 『桃木書院図書館案内』

桃木書院図書館は、明治35年(1902)に桃木武平が開設した私設図書館です。私財を投じて収集した資料を、生田町の自邸で公開しました。この「桃木書院図書館案内」は、明治36年(1903)10月に発行されたものです。

桃木武平は、安政5年(1858)神戸村(現神戸市中央区)に生まれ、明治10年(1877)家業である造船業を継ぎました。市会議員を務めた時期もあり、海事史料の収集・研究家としても知られていました。また、明治33年(1900)に創立された図書館研究団体「関西文庫協会」の会員でもありました。

桃木書院図書館は、国史学の普及を目的としており、蔵書は主に国史に関するものが中心でした。案内によると、開館日は土曜日曜、遠隔地または多忙のため来館できない人は、図書名と事項を明瞭に記載し返信料を封入して申込み調べて回答する、とあります。

明治43年(1910)に閉鎖、その後、明治44年(1911)神戸市立図書館が設立されるに当たって、蔵書の一部や備品が寄付されました。



川崎正蔵と宝玉七宝

明治三十年代、布引に七宝焼の工場がありました。そこでは、名古屋から招かれた七宝職人が制作に励んでいました。

この工場は、川崎造船所の創業者であり、美術品収集家としても有名であった川崎正蔵が、自邸の敷地内に設けたものです。

川崎正蔵は、天保八年（一八三七）鹿児島に生まれました。早くに父親を亡くし、商売に従事するようになります。長崎で貿易商の修行を積み、大阪で海運業を始めましたが、失敗。その後、旧薩摩藩士たちが設立した琉球糖を扱う砂糖会社に入社、明治六年にそれまでの経験を認められ、汽船会社副頭取に就任し、琉球航路を開設しました。

こうして海運業に携わっていくうちに、また二度の海難に遭遇したこともあわせて、西洋型船舶に強く関心を持ち、正蔵は造船業への進出を決意していきます。明治十一年に東

京の築地に造船所を、明治十四年には兵庫区東出町に兵庫造船所を設立しました。

この頃、明治政府は「富国強兵」「殖産興業」をスローガンに、様々な分野で、西洋の制度や技術を導入する政策をとりました。

それはまた、性急な近代化を進めるあまり、日本の伝統的な美術品に対する関心が低くなる傾向を生じさせ、日本の古美術品が安価で海外へ



（『七宝—日本の美術』より）

輸出されていく状況を引き起こしました。貴重な美術品が大量に流失していくことを憂いた正蔵は、築地に造船所を創設したころから、日本や中国を中心とする古美術品の収集を始めます。

明治十八年から着工した布引の邸宅の広大な敷地内には、収集した美術品を収蔵する美術館とそれを展示する「長春閣」を設けました。絵画や彫刻、工芸品など二〇〇〇点余のコレクションだったようです。

明治二十九年に造船業の第一線から退いた正蔵は、美術品収集家としてだけでなく、自ら制作へと乗り出しました。七宝焼の本場である名古屋から職人を招くことにしたのです。

神戸へ招かれた七宝職人・梶佐太郎は、近代七宝の創始者である梶常吉の孫（次男という説もあり）で、常吉が開発した七宝技術を受け継いでいました。数名の職人を連れ、布引へやってきたのは、明治三十年のことです。正蔵は、自らのコレクションのなかにある中国明時代の七宝（琺瑯）をモデルに、青色を基調とした中国七宝の再現を求めました。梶佐太郎は、釉薬の調整や材料の収集、職人の養成など大変な努力を重ねました。正蔵も、意匠を自ら担当し、模様や花瓶などの形状について考案を重ねたそうです。三年の苦労の末、ついに完成した七宝は「宝玉七宝」と名づけられました。それは、中国七宝の再現のみならず、菊花模様を用いるなど日本の要素を取り入れたものもありました。

明治時代の工芸品は、貿易拡大のための重要な輸出品でした。また、十九世紀後半、欧米では「ジャポニスム」がブームになっており、明治

六年のウィーン万国博覧会では、陶磁器が好評でした。神戸でも、明治初年から輸出向けに「神戸薩摩焼」が作られました。明るい象牙色の器体に、山水、花鳥、風俗などの色絵付けをし、金彩を施した絢爛な焼き物です。最盛期には絵師が百五十人もおり、神戸の特産品の一つでした。明治三十三年のパリ万国博覧会では、正蔵は、収集した美術品とともに、完成した七宝の大花瓶と大香炉を出品しました。宝玉七宝は、大賞を受賞し、買い取りの希望もありました。けれども、売り渡すことはなく、また、これ以外の宝玉七宝も、皇室や神社仏閣への献納、友人への土産などに用いられるばかりで、市場へ売りに出されることはありませんでした。

大正元年に正蔵が亡くなった後も、宝玉七宝は作られていましたが、大正十二年に梶佐太郎が亡くなった後は、継ぐ者がおらず、工場は廃れてしまいました。こうして、わずか三十年足らずで、宝玉七宝は幕を下ろしたのでした。

参考図書

『造船王川崎正蔵の生涯』三島康雄
『七宝—日本の美術』至文堂 ほか